

生間や学生と教員との間の親睦を図ることができた。

昨年度、学科コンセプトを一新した流れとして、学科独自のパンフレットも新しく作成した。学科共通の名刺デザインも設定し、教員および学生にも共有した。本年度の広報として学科力を結集したのは、オープンキャンパスであった。従来のパネル展示中心の静的なものから、学科 OBOG らを含めた戦略会議において、いかにこの学科コンセプトを高校生に伝えるのかという点から見直して一新した。まずは、幅広い専門を持つ本学科と高校生の興味関心とをつなぐために、「発見！あなたにぴったり研究テーマ」と称して、ゲーム感覚で楽しみながら自分と教員のキーワードを探してつなぐ参加型展示空間を設置した。また、「そうだったのか！『もののけ姫』が挑んだ環境問題」として Prezi を用いた特別授業を実施した。学科教員それぞれの専門から『もののけ姫』を読み解いた内容を紹介することで、学科の幅広さと切り口の多様性を表現したものである。新コンセプトのテーマカラーが菜の花色であることから、「菜の花カフェ」として学生によるカフェも開催した。これらのメニューは充実していたものの、実施空間が奥まった場所であり、参加者の流れと空間的制約が大きく、今後の改善が課題となった。

また、学科 web で毎月の教員コラムの掲載を開始した。高校生や在校生向けに旬の話題を気軽に語っていただくものであり、それぞれの教員の新たな面を垣間見ることができる。

11月に行われた特別選抜入試では、募集人員8名に対して推薦14名の出願があった。推薦入試の志願倍率は1.75倍であった（前年は0.87倍、前々年は1.3倍）。2月・3月に行われた一般入試では、実質倍率は前期1.25倍（前年2.6、前々年1.5倍）、後期1.6倍（前年5.4、前々年1.9倍）であった。さらなる倍率のアップが課題である。

3月には45名の卒業生を送り出した。うち4年前の2011年4月の入学生は36名である。同年に入学した45名のうち、卒業できなかったもの（留年者）は9名であった。

開学20周年という節目を見据えて、11月湖風祭の日に学科同窓会を開催する予定である。800名にも及ぶOBOGの名簿整理に着手した。社会で活躍するOBOGも増えてきており、今後はより密接な関係を育んでいきたいと考えている。

開学以来、本学に多大なる貢献をいただいた秋山道雄教授が定年により3月末に退職されます。秋山先生、20年間、ありがとうございました。なお4月に、1名の教員（准教授）が着任する予定である。

## 環境建築デザイン学科のこの一年

張 晴原

環境建築デザイン学科長

10月に川井操先生を助教としてお迎えすることができた。川井操先生は2004年に本学科を卒業し、2010年に本学大学院で博士号（環境科学）を取得した。国際舞台で建築活動をなされ、東京理科大学の助教などを経て、本学科で教鞭をとることになり、本学科OB教員の第一号でもある。また、高田豊文先生が永年にわたり最適化技術の建築構造分野への応用研究、木造住宅の耐震要素の力学性能に関する研究などで優れた業績を上げており、10月に教授に昇格された。高田豊文先生と川井操先生の教育、研究活動の新たな展開と大学の運営管理における活躍を期待している。芦澤竜一准教授が第5回木質建築空間デザインコンテスト最優秀賞を受賞されるなど建築設計分野で活躍され、1月に優秀職員として学長に表彰された。今後のますますのご発展を切望している。今年度の卒業研究は24名が論文を、27名が設計を行った。谷口雄飛君の論文と大野宏君の作品は優れた創意が認められ、EA賞が贈られた。今後の研究・創作活動のさらなる展開が期待される。本年度の卒業論文・制作を縦覧し、都市・建築における環境の持続性や衰退する地域環境の再生に関するテーマが多かった。「環境建築」と謳っている数少ない学科の1つとして当然のことかもしれないが、今後とも時代の要請に応えられるように、常にタイムリーな研究・制作に挑戦し続けて欲しい。本年も卒業研究・製作の発表会は学生が自主的に運営している。また、学生主体で運営している「DANWASHITSU」が実り多い活動をしており、建築界の第一線で活躍しているゲストを招き、活発な議論を行っている。このような自主的活動は学生のモチベーションの向上、建築的思考の深化、組織力の育成、社会適応能力の取得などに重要な意味をもっており、確実に学生の成長と進化につながっている。本年度も本学科は学生の国際交流に精力的に取り組んでいる。本学科の正規の留学生にスペイン、中国などからの交換留学生が加わり、一層国際色の強い学科となっている。本学科はこれからも国際性と地域性を車の両輪のように、バランスよく生かしながら邁進していくと思われる。永年にわたり本学科の教育研究と本学の運営管理に尽力された布野先生が大学を去られ、時代の移り変わりが感じさせられる。一方、川井先生のような元気の溢れる若い先生が絶えずスタッフに加わり、学科に新鮮なエネルギー

ギーを与えて下さっている。これからも教員、職員と学生が一丸になって、本学科歴史の新たな一頁を創っていく所存である。

## 生物資源管理学科のこの1年

須戸 幹

生物資源管理学科長

### 学生の動向

2015年3月に卒業生61名を送り出すことができた。就職した学生は37名で、うち公務員は5名であった。また、大学院には本学10名、京大3名、東大、名大、神戸大、大阪府大、奈良先端に各1名が進学することになった。それぞれの就職先、進学先で、本学科で学んだことを基礎としてますます活躍されることを期待している。

これまで就職活動は、3回生の12月に就活解禁、4回生4月に選考開始、10月内定のスケジュールで動いてきたが、これが最後になる学年かもしれない。例年通り、学生が内々定を得た時期は4月から年明け後までと幅広い。本学科は卒業研究が農事歴とともに進む場合が多いため、就職活動と実験・研究が重なる。それにもかかわらず卒論発表会で全員が1年間の成果を発表できたことは立派であると思う。

一方、就職希望者に対する内定率は86%であった。個別に事情があるため単純に比較することはできないが、過去5年間の90%以上と比べて今年は低い数字となった。学生個人の希望を踏まえつつ、就職希望者に対しては就職支援に対する教職員のより一層の努力が必要であることを痛感している。

入試倍率は前期試験が3.4倍、後期試験が14.4倍で、例年並みの結果になった。龍谷大学が瀬田キャンパスに開設した農学部の募集が今年度から始まり、受験生の競争を心配していたが、入試倍率をみる限り初年度は大きな影響はなかったようである。しかしこのことは、「生物生産と生物機能を適切に制御、管理する知識と知恵を学び、循環型社会の形成を目指す」をキャッチフレーズに、これまで以上に本学科の魅力を発信していく必要性をあらためて認識するきっかけとなった。

### 学科の動向

今年度は、個体群生態学・行動生態学分野の高倉准教授が4月に着任された。本学科には昆虫、爬虫類、哺乳類などのさまざまな動物に興味を持つ学生

も多いが、経験と実績のある高倉先生が赴任されたことは心強い限りである。

一方で、岡野先生、小谷先生、上田先生が定年退職されることになった。3名の先生方はいずれも県立短期大学時代から長年にわたり教鞭をとってこられた。県立大学では、岡野先生は家畜の栄養生理機能、小谷先生は微気象学的観点から見た物質輸送、上田先生は土壌微生物と湖沼環境をそれぞれ柱として、さまざまな研究活動を精力的に行い、多くの卒業生、大学院生を送り出された。また、学生指導、大学運営にも多大なご尽力をいただいた。3名の先生方が一挙にご退職されるのは痛恨であるが、今後はこれまでのよき伝統を守り、さらに発展させることが残った教員と新たに赴任するメンバーの責務であると考えている。

## 環境科学研究科

### 環境動態学専攻のこの一年

鈴木 一実

環境動態学専攻長

2014年度も環境動態学専攻における学生の出入りは比較的順調でした。2014年4月の博士前期課程への入学者は15名と募集人員を3名下回る結果となりましたが、博士後期課程へは3名が入学いたしました。2015年3月の博士前期課程の修了者は22名で、内訳は生物圏環境研究部門：3名、生態系保全研究部門：12名、生物生産研究部門：7名でした。4月以降の新しい環境でのご活躍を祈ります。また、博士後期課程では4名の方が晴れて学位を取得されました。渡部俊太郎さん(Multi-scale genetic structure and reproductive characteristics of *Machilus thunbergii* Sieb et Zucc)、金尾滋史さん(琵琶湖周辺域における水田利用魚類の保全生態学的研究)、舟尾俊範さん(ナマズを中心とした水田利用魚類の繁殖生態および保全に関する研究)、殷安斎さん(Dinoflagellates from Hainan island: Potential threat for transporting harmful algae from Hainan to Japan)の4名です。これまでのご努力に敬意を表すと同時に、今後のご活躍を期待いたします。一方、2015年4月からは博士前期課程へ20名、博士後期課程へは5名が入学あるいは進学する予定です。

教員にも若干の入れ替わりがありました。2014年4月には高倉准教授を迎えることができました。